

German Institute for Japanese Studies (DIJ)
ドイツ-日本研究所

International Conference
国際会議

**PAN-ASIANISM IN MODERN JAPANESE HISTORY:
COLONIALISM, REGIONALISM AND BORDERS**

**近代日本史におけるアジア主義：
植民地主義、地域主義、境界**

**November 29 - 30, 2002
2002年11月29 - 30日**



Conference venue
Tokyo International Exchange Center, Plaza Heisei, Media Hall

会場
東京国際交流会館 プラザ平成 メディアホール

日英同時通訳付

Supported by:
The Japan Foundation
Embassy of the Federal Republic of Germany

助 成
国際交流基金
後 援
在日ドイツ大使館

German Institute for Japanese Studies (DIJ)
3-3-6 Kudan Minami, Chiyoda-ku, Tōkyō 102-0074, Japan
ドイツ-日本研究所 〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-3-6
Tel.: +81-(0)3-3222-5077 Fax: +81-(0)3-3222-5420
e-mail: dijtokyo@dijtokyo.org homepage: <http://www.dijtokyo.org>

Organization: Sven Saaler
Secretariat: Sugimoto Eiko

企画担当：スヴェン・サーラ
事務担当：杉本 栄子

近代日本史におけるアジア主義： 植民地主義、地域主義、境界

冷戦終結後の国際政治情勢の変化及び国際秩序の再構築の中で、地域内の協力、統合という傾向が急速に進んでいる。国レベルの取り組みは不十分なままにされる一方、万国理念を現実化するには未だ程遠いという時代において、地域主義は国際協力に向けての足掛かりとなっているようである。ヨーロッパは、地域統合と国民国家の壁を乗り越える探求の先駆者として考えられているが、北米も経済統合という点ではヨーロッパに追随している。しかし、国境を越えた地域統合の制度化という面では、アジアという地域に於いてはなおあらゆる点で多くの障害にぶつかっているようである。ASEAN+3 イニシアチブのような新たな取り組みなども、未だ過去の遺産を背負っているように思われる。この過去の遺産の重要な一局面としては、(汎)アジア主義の思想を取り上げることができる。このアジア主義は、東アジアにおける地域統合に向けた初期の動きの思想的底流でもありながら、日本のアジア植民地支配を正当化する手段としても利用されてきた。このような経過をたどったことは、アジア主義の研究にとって大きな問題になったと言えよう。

そういう過去の経験を念頭におきながら、現代のアジア地域主義概念の先駆としてのアジア主義(汎アジア主義)の思想・運動の探究、歴史的観点から地域統合への思想的、制度的な取り組みを検討し、アジア主義思想の様々な利用及び形態のあり方を分析するのがこの会議の目的である。加えて、この会議では、歴史上のアジア主義思想と、よく知られている「アジア的価値観」の現象との関係を分析した上、アジア主義が日本の外交政策、思想史に於いて永続的な力として残っていることを明らかにすることを目的としている。

汎(Pan-)運動(汎スラブ主義、汎ゲルマン主義、汎ヨーロッパ主義)の概念は、本来ヨーロッパ史の枠組みの中から始まったので、アジア史の一局面を分析するには適切でないという声もある。しかし、早くも19世紀後期には「アジア主義」あるいは「汎アジア主義」、「大アジア主義」の用語が、日本のメディア、知的論説・論議、そして外交政策で登場する。それ以降も(汎)アジア主義は様々な形で現われ、東アジアに於ける日本の植民地支配を正当化する道具として、日本の地域覇権^{ヘゲモニー}に思想的な

底流として機能していた。一方、アジア主義思想はそのような国民国家の国利追求のための政治的手段という一次元的な解釈を越えた性格もある。つまり、汎アジア主義思想はアジアの人々を植民地支配からの独立を求める闘争へと突き動かす手段として、また「欧米」に対する自らの地域アイデンティティーを確立する道具としても役に立ったのである。更に汎アジア主義概念は今日でも用いられており、普遍的であるとされている欧米の考え方に対し、いわゆる「アジア的価値観」を定義しようとする中に最も顕著に見られる。この視点に立って考えると、汎アジア主義現象はヨーロッパの様々な「汎」運動よりも国民国家の国境を超えた性格が強いのかも知れない。集団的地域アイデンティティー確立の為、国民国家の国境を越えて、一定の結合力のある文化的要素、例えば言語/文字、宗教、歴史上の共通の経験、地理、人種などに注目したものと思われる。この会議では、19世紀後期から第二次世界大戦後までの日本に於けるアジア主義のもつこれらの側面を取り上げることにより、アジア主義、汎アジア主義と地域主義の一般的な歴史的背景の研究に対して、ケース・スタディを取り上げることで、理論的な面からの貢献と、更に将来の研究をも鼓舞することを目的としている。参加者は歴史学、政治学、社会学、日本学の分野を専門とする研究者である。

プログラム

11月29日(9:00-18:00)

9:00-9:30

開会挨拶 イルメラ・日地谷-キルシュネライト(ドイツ-日本研究所)
趣旨説明 スヴェン・サーラ(ドイツ-日本研究所)

9:30-11:30 **パネル1：比較的観点から見た汎アジア主義**

座長：イサ・ドッカ(ドイツ-日本研究所)
日本帝国主義の政治哲学に見られるドイツ^{コスモポリタニズム}世界主義理想
ジョン・ナムジュン・キム(コーネル大学)
ヨーロッパ統合と東アジア
ロマノ・ウルピッタ(京都産業大学)
日本帝国主義における「汎アジア主義」と「共栄」
リ・ナランゴア(オーストラリア国立大学)
コメンテーター：ロルフ-ハラルド・ヴィッピヒ(上智大学)

11:30-13:00 昼休み

13:00-15:00 **パネル2：地域アイデンティティの創出：理想と現実**

座長：アンドレア・ゲルマー(ドイツ-日本研究所)
興亜会のアジア主義と植木枝盛のアジア主義
黒木 彬文(福岡国際大学)
日本陸軍の地域主義概念
野島(加藤)陽子(東京大学)
アジア主義とナショナリズムの谷間：満川亀太郎の「日本改造」と「アジア解放」思想
クリストファー・シュピルマン(拓殖大学)
コメンテーター：酒井 哲哉(東京大学)

15:00-15:30 休憩

15:30-17:30 **パネル3：地域主義、ナショナリズム、自民族中心主義**

座長：ロルフ-ハラルド・ヴィッピヒ
「アジアの劣勢」：大正の「文明批評家」と地域統合
ディック・ステゲウェルンス(大阪産業大学)
井上秀子と井上雅二の思想に於けるインターナショナリズムと汎アジア主義
マイケル・A.シュナイダー(ノックス・カレッジ)
比較的観点からみた汎ヨーロッパ主義運動
ハラルド・クラインシュミット(筑波大学)
コメンテーター：スヴェン・サーラ

17:30-18:00 討論

11月30日(9:30-17:30)

9:30-12:00 **パネル4：地域^{ヘゲモニー}覇権の創出：「新秩序」に向けた日本の探求**

座長：モニカ・シュリンプ(ドイツ-日本研究所)

徳ある新秩序のビジョン：安岡正篤の王道論

ロジャー・ブラウン(南カリフォルニア大学)

大日本帝国の中の民族概念の役割

ケヴィン・ドーク(ジョージタウン大学)

汎ゲルマン主義と汎アジア主義の出会い：ナチスドイツと日本の大東亜政策

ゲルハルト・クレプス(ベルリン自由大学)

コメンテーター：波多野 澄雄(筑波大学)

12:00-13:30 昼休み

13:30-14:30 **パネル5：アジア主義の変形：戦中から戦後へ**

座長：スヴェン・サーラ

運命の構築：蠟山政道と戦中日本の東亜共同体

ヴィクター・コシュマン(コーネル大学)

国際関係とアジア主義：戦前・戦後・現在

初瀬 龍平(京都女子大学)

14:30-15:00 休憩

15:00-16:30

戦後知識人にとっての「アジア」

小熊 英二(慶応義塾大学)

1955年のバンドン会議と植民地主義の克服

クリスティン・デネヒ(カリフォルニア州立大学フラートン校)

コメンテーター：藤原 帰一(東京大学)

16:30-17:30 最終討論

総括 三輪 公忠(上智大学名誉教授)

17:30

閉会挨拶

パネル1：比較的観点から見た汎アジア主義

パネル1では、一般に汎(Pan-)運動の歴史的ルーツおよび背景はどのようなものだったのか？汎(Pan-)運動および地域アイデンティティや統合の概念は、いかにしてアジアの枠組みへと伝わったのか、さらに完全に異なる文化および政治的背景に適合させるために、どのように調整されたのか？ヨーロッパ政治学や哲学の中で、汎アジア主義の概念形成に最も大きな影響を与えた要素は何だったのか？最後に、アジアの地域主義を、世界の他の地域主義と異なるものにしたのは何だったのか？などについて考察し、討論する。

座長：イサ・ドッカ(ドイツ-日本研究所)

日本帝国主義の政治哲学に見られるドイツ^{コスモポリタニズム}世界主義理想

ジョン・ナムジュン・キム

概要

京都学派の三木清と田邊元は、哲学的・政治的思索の柱として、ヘーゲル派哲学の概念である“媒介”を用いている。本発表ではこのことの意味づけを試みる。また、この概念と、世界主義観念におけるある種の曖昧性が、どうつながるかについても述べる。二人がどのようにして、暗黙のうちに“Zum ewigen Frieden”の中でカントが述べる世界主義の抽象的観念を、日本帝国主義構想の論拠としているかに焦点をあてる。

三木と田邊は、世界主義を、より“具体的”概念として支持し、カントの観念を批判するため、これを受け入れている。しかしながら、“日本”が個としての存在の主要単位である限り、この、より“具体的”概念は、ナショナリズムと分けては考えられない。ヘーゲル哲学の媒介は、それ自体“ナショナリスト”ではないが、媒介概念の導入は、カント世界主義の観点から考えると、政治的曖昧さを生む。政治で言う媒介とは、世界のあらゆる主体の徹底的な相互決定により、究極的な世界主義の形を提示する。その一方で、媒介の概念は、まず、既成の、たとえば、大日本帝国といった地政学的領域で適用されることも考えられる。その後、さらに広い、世界全体を対象とした領域への適用が考えられる。大日本帝国が、他の国民国家によって媒介されるというようにである。

後者を、ナショナリズム、世界主義といった概念的なことばで説明することは不可能である。むしろ、後者の場合、媒介は、帝国主義の論理を意味する。ここで媒介という場合は、文化的差異すなわち、日本、沖縄、朝鮮半島、台湾などを内部に包含している。このような形の“多文化主義”は現在でもなお存在し、違った形の帝国主義のモデルになっているので、それらの現象の史的考察が現代の世界における新しい形の帝国主義、例えばアメリカ帝国主義の考察にも繋がるのではなかろうか。

略 歴

コーネル大学ドイツ研究学部博士課程に在籍し、近代問題形成における暴力の文学的、哲学的表現についての学位論文を執筆中。1972 年サンフランシスコ生まれ。カリフォルニア大学サンタ・クルス校、ウィーン大学、コーネル大学で、哲学、ドイツ文学、アジア学を学ぶ。1996 年カリフォルニア大学サンタ・クルス校学士課程修了。2000 年コーネル大学文学修士課程修了。2000 年～2001 年フルブライト留学生として東京外国語大学に留学、ヘーゲル派政治哲学の京都学派への影響についての研究を行った。その研究の一部が「Cultural Heterogeneity and Philosophical Nationalism: the Idea of 'Japan in the World' in Miki Kiyoshi」として『Quadrante』4、2002 に掲載された。

ヨーロッパ統合と東アジア

ロマノ・ウルピッタ

概要

グローバル化の気運は、現在もはや国家間レベルのことではなく、寧ろ地域が主体になっていると言えよう。20 世紀前半に二度の世界大戦があったにもかかわらず、西ヨーロッパ諸国は同世紀の後半において統合プロセスを推し進めることに成功した。そして、このプロセスは次第にヨーロッパほぼ全域にまで拡大している。この成功の背景には、意外にも関係国が統合への強い気持ちを共有していたことが根底にあった。これは、おそらく長い間の競争と協調の体験によってもたらされたものであり、この体験が地域内関係のノウハウとなった。東アジアの場合は、東南アジアの国々が統合のプロセスを進めたが、北部の国々の関係は依然として二国間関係に留まっている。現在、東北アジアの国々が相互間、また東南アジアの国々との間で築いている強い経済的相互依存の関係は、有機的な統合に発展していない。東アジア諸国の統合を進めることなくして、同地域は世界経済の第三の極としての地位を築くことができないであろう。ヨーロッパの体験は、東アジアの統合のモデルになり得るであろうか？文化、経済、政治の状況は大きく異なり、同地域の統合に中国と日本という二大国をどのように抱き込むかという問題が、これからの東アジアにとって最大の課題である。

略歴

京都産業大学比較文化及びヨーロッパ経営学部教授。1939 年ローマ生まれ。ローマ大学法学部卒業後、イタリア外交官勤務を経て 1978 年より現職。最近の著書に『不敗の条件 - 保田與重郎と世界思潮』（中央公論社、1995）；『ムッソリーニ - イタリア人の物語』（中央公論新社、2000）がある。

日本帝国主義における「汎アジア主義」と「共栄」

リ・ナランゴア

概 略

19世紀末期から20世紀中頃までの汎アジア主義の基礎的要素は、西洋の帝国主義に対するアジアの諸民族の団結への気運であった。汎アジア主義者の多くは、宗教や哲学における共通の基盤等、アジア文化の類似性を強調した。ヨーロッパとアジアでは、二つの地域の文明は哲学的に相容れないとする傾向が強かった。そのため、中国人や日本人をはじめとする多くのアジア人は、西洋技術の力を認める一方で、西洋の哲学を拒絶し、アジア諸国を結びつける共通の文化的特徴を見出そうとした。そして、彼らの見出した「東洋の精神」の基盤の上においてのみ、西洋技術の吸収が許された。「東洋の精神」の基盤として最も代表的な要素として取り上げられるのは仏教である。西洋のキリスト教の影響力を抑えるために、日本の仏教家たちは他のアジア諸国の仏教家たちとの提携を唱えた。それによって、団結意思、連帯感が生まれた。この発表では、日本の仏教団体をはじめとする日本の宗教団体が、他のアジア諸国に布教活動を広げようとした動機について検討し、それを通してリージョナリズムの順応性について検証する。また、「アジア統合」の名において、より「文明的」で「新しい」形の仏教である日本仏教を他のアジア諸国の仏教徒に勧めた際に直面した問題を検討する。

略 歴

オーストラリア国立大学教授。1963年内モンゴル生まれ。中国、日本、ドイツの大学で学び、1998年ドイツ、ボン大学博士課程修了。研究者として3年間コペンハーゲンのNordic Institute of Asian Studies (NIAS)勤務を経て現職。最近の著書に『Japanische Religionspolitik in der Mongolei 1932–1945. Reformbestrebungen und Dialog zwischen japanischem und mongolischem Buddhismus』(1932年～1945年に於ける日本の対蒙古政策：日本仏教と蒙古仏教の対話, Harrassowitz, 1998); 『Imperial Japan and National Identities in Asia』(日本帝国とアジアのアイデンティティ、Robert Cribbと共編、RoutledgeCurzon、近刊)がある。

コメンテータ： ロルフ・ハラルド・ヴィッピヒ

略 歴

上智大学比較文化学部（西洋史・国際関係）教授。1950年レーヴァークーセン生まれ。ケルン大学で歴史学、哲学、政治学、人類学を学び、1985年博士課程修了。1985年～1989年まで同大学で歴史学を教え、1991年から現職。主な著書に『Japan und die deutsche Fernostpolitik 1894–1898』(日本とドイツの東亜政策、1894～1898、Steiner、1987);『Vermiedene Kriege』(避けられた戦争、共編、Oldenbourg、1997);『Japan als Kolonie?』(植民地日本?、Abera、1997);『War, Diplomacy and Public Opinion: German-Japanese Relations 1895–1945』(戦争、外交、世論：1895～1945年の日独関係、共編、RoutledgeCurzon、近刊)などがある。

パネル2：地域アイデンティティの創出：理想と現実

パネル2では、地域アイデンティティ構築に必要な普遍的要素とは何か？言語、筆記文字、人種、宗教はどのような役割を果たすのか？日本の知的論説・論議に於いて語られた、汎アジア主義思想に関する主な内容は何だったのか？地域アイデンティティはどのように創出されたのか、また、政治的対話や政策立案過程においてどのように表現されていたか？寧ろ文化的に定義されていた明治期のアジア主義は、大正・昭和期の政治色の強いアジア主義と比べて、どのように異なっていたか？などについて考察し、討論する。

座長：アンドレア・ゲルマー（ドイツ-日本研究所）

興亜会のアジア主義と植木枝盛のアジア主義

黒木 彬文

概略

1880（明治13）年に成立した近代日本最初のアジア主義団体・興亜会を取り上げ、その成立の歴史的背景、会の目的、会員構成、会の構造、会員の思想、活動などを明らかにする。つぎに興亜会のアジア主義を批判した自由民権運動の思想家にして自由党の指導者・植木枝盛のアジア主義の展開について私見を述べる。そして植木が没した1885（明治25）年以降の自由党のアジア主義が日清戦争期にどのように変容していったかに触れる。

略歴

福岡国際大学国際コミュニケーション学部教授。九州大学大学院法学研究科修士課程修了後、東京大学、九州大学勤務を経て現職。研究分野は日本のナショナリズム、近代日本のアジア主義。主な編著書・論文に『異国と九州』（共著、雄山閣、1992）；『興亜会報告・亜細亜協会報告（復刻版）』（共編・解説、不二出版、1994）；『「1968年」時代転換の起点』（共著、法律文化社、1995）；「興亜会の成立」『政治研究』（九州大学）30号、1983；「興亜会の基礎的研究」『近代熊本』22号、1983；「自由民権運動と万年会の成立」『政治研究』（九州大学）34号、1987；「興亜会・亜細亜協会の活動」『政治研究』（九州大学）39号、1992；「植木枝盛の対外論（1）」『福岡国際大学紀要』7号、2002などがある。

日本陸軍の地域主義概念

野島（加藤）陽子

概要

戦前期において、陸軍が独自の安全観をもって、国防政策や外交政策に影響力を行使していたことは、クラウリー（James B. Crowley）教授やバーンハート（Michael A. Barnhart）教授の研究によってよく知られている。これらの研究は、世界恐慌と中国国民党による中国ナショナリズムの昂揚という2つの大きな変動が、東アジアを襲った後の時代、すなわち1930年代以降を分析の中心においてきた。

しかしながら、第一次大戦後から一貫して、陸軍にとって、戦争が起こる可能性の高い問題として自覚されていたのは、中国の経済的・政治的「混乱」状態を背景とした日米対立であると捉えられている。それでは、陸軍軍人たちは日本と中国のいかなる関係を理想と考えていたのだろうか。1920年代から40年代にかけて、彼らのいくつかの特徴的な考え方について、本庄繁、宇垣一成、石原莞爾、板垣征四郎らの例から考えたい。

略歴

東京大学大学院人文社会系研究科日本史学助教授。1960年10月15日生まれ。1989年3月東京大学大学院人文科学研究科博士課程（国史学）修了。山梨大学助教授を経て1994年4月から現職。著書に『模索する1930年代 日米関係と陸軍中堅層』（山川出版社、1993年）；『徴兵制と近代日本 1868-1945』（吉川公文館、1996年）；『戦争の日本近現代史』（講談社、2002年）がある。翻訳にルイズ・ヤング著『総動員帝国』（岩波書店、2001年）がある。

アジア主義とナショナリズムの谷間：満川亀太郎の「日本改造」と「アジア解放」思想

クリストファー・W.A. シュピルマン

概要

本報告では、ジャーナリスト、作家、大学教授であった満川亀太郎（1888年～1936年）の思想と行動に焦点を当てる。戦後、日本を専門とする歴史家の間ではほぼ完全に無視されてきたが、早稲田大学で学んだ満川はアジア主義を熱心に提唱し、戦前の日本の右翼運動の中心的な人物であった。1920年代の最も有名なアジア主義・革新派組織である老壮会および猶存社を結成し、その後もその他の急進的組織で活躍した。革新派との関わりの他に、満川は平沼騏一郎の国本社や内田良平の黒竜会などの伝統的な右翼との交際もあった。

この報告では、先ずアジア、アジアにおける日本の使命、日本のナショナリズム、日本の植民地政策、政党政治、人種問題に関する満川の思想の変遷をたどったあと、この変遷を歴史的な文脈の中に位置付け、また満川の思想を形成した国内外の影響について論じる。満川の中でアジア主義とナショナリズムとの間に緊張関係があったことに焦点を当て、満川がこの矛盾にどう折り合いをつけていこうとしたのかについて説明する。次に、満川のアジア主義的な思想が、戦間期の日本の右翼運動にいかなる影響を及ぼしたのかという問題を考察したい。満川の革新的な思想がどのように伝えられ、陸海軍、官僚、ジャーナリストといった満川の広範な人脈の中で、その革新的な思想に対してどのような反応があったのかを検討する。

略歴

拓殖大学日本文化研究所客員教授。1951年生まれ。1980年ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）日本学科卒。1986年～1989年、東京大学大学院法学政治学研究科外国人研究生、1993年米エール大学で博士号を取得。1997年より現職。専攻は日本政治思想史。最近の学術論文に「解題」（『満川亀太郎：地域・地球事情の啓蒙者』、拓殖大学、2001）、「Kita Ikki and the Politics of Coercion」（『Modern Asian Studies』, 36:2（May 2002））がある。

コメンテータ： 酒井 哲哉

略 歴

東京大学教養学部教授。近代日本史専攻。主な著書・論文に『大正デモクラシー体制の崩壊』（東京大学出版会、1992）；『東亜協同体論』から『近代化論へ』、『年報政治学 1998・日本外交におけるアジア主義』（岩波書店、1999）；『戦後外交論の形成』、『戦争・復興・発展』（東京大学出版会、2000）；『アナキズム的想像力と国際秩序』、『ライブラリー相関社会科学』第7号、2001 などがある。

パネル3：地域主義、ナショナリズム、自民族中心主義

パネル3では、汎アジア主義思想は、ナショナリズムや民族アイデンティティーの論議といかに関連していたのか？汎アジア主義は、日本のナショナリズムと植民地支配を助長し、更にアジアに於ける日本の優越性を確信し続けるために使われたただけなのか、それとも国境を越えたアイデンティティーや地域統合の構築に有利に働いたのか？汎アジア主義は、アジア以外の地域でどのようにとらえられていたのか、また、国際政治にどのような影響を与えたのか？などについて考察し、討論する。

座長：ロルフ・ハラルド ヴィッピヒ

「アジアの劣勢」：大正の「文明批評家」と地域統合

ディック・ステゲウェルンス

概略

日本が西洋文明に追いつこうとしていた明治時代には、日本がアジア諸国と同盟を結ぶという考えが、福沢諭吉の脱亜論の下にうずもれていたかのように見えた。しかし、昭和時代に入ってからそのような考えは、右派のレトリックや日本政府のプロパガンダで多用されたあまり、過去を振り返る時、悪名高い「大東亜共栄圏」の構想と同様か、それに連座するものとみなされ、その結果、疑わしい、危険な考えとされてきた。そのため、戦前の近代日本で「尊敬されるべき」人物がそのような考えを持っていても、それを見て見ぬ振りをする傾向があった。そのような考えが無視できないほど極端な場合には、戦前および戦時中の疑わしい内容のために極めて否定的な意味合いを持つ「アジア主義」と一括にされた。

しかし、アジア統合についての考えが、絶えず日本知識人たちの精神構造における一要素であったことを否定することは難しい。また、西洋諸国をアジアから追い出すという長期的政策を共有しない日本人もほとんどいなかった。しかし、この政策は、短期的に政治的、経済的、戦略的な理由から抑制される時が多かった。いずれにしても、こういう考えを表現したもっとも一般的なものは、「アジア主義」とは遠くかけ離れていた。なぜなら、大半の日本人は、反欧米というアジア共通の政治的目標を共有できていたにもかかわらず、アジア人としての共通のアイデンティティを見出すことができず、またそれを見出したとしても、そこに肯定的な内容を付与することができなかった。この発表では、「文明批評家」として知られる1910年代および1920年代のオピニオンリーダーたちの地域統合について考察する。

略 歴

大阪産業大学経済学部助教授。1966 年生まれ。博士論文をライデン大学に提出、ライデン大学、京都大学、東京大学で学ぶ。主な編著書、論文に『Adjusting to the New World – The Taishô Generation of Opinion Leaders and the Outside World, 1918–1932』(2003 年刊行予定);『The End of World War One as a Turning Point in Modern Japanese History』『Turning Points in Japanese History』(Bert Edstrom 編、Japan Library, 2002); 『Nationalism and Internationalism in Imperial Japan. Autonomy, Asian Brotherhood, or World Citizenship?』(RoutledgeCurzon、近刊) その他大正時代の日本の知識人についての論文が多数ある。

井上秀子と井上雅二の思想に於けるインターナショナリズムと汎アジア主義

マイケル・A. シュナイダー

概要

本発表では、インターナショナリストから汎アジア主義者に転向した井上秀子（1875年～1963年）とその夫井上雅二（1876年～1947年）の生涯について考察する。二人の生涯は1920年代のインターナショナリストたちにとって、1930年代の汎アジア主義が魅力的であったことを示している。さらに、二人の生涯を考察する時、汎アジア主義の魅力とジェンダーの重要性についても検討することができる。日本人女性たちは、1920年代の国際外交を目の当たりにすることによって、それ以降、汎アジア主義を支持するようになったと考えることができる。

数多くの驚くような知的転向が1930年代の日本で見られたが、その中でも井上秀子のファシズムへの転向は際立っている。1920年代、井上秀子は日本を代表する女性のインターナショナリストであった。当時、井上秀子は日本国内また国際会議の場で一貫して平和を主張した。しかし、1930年代および1940年代になると、アジアにおける日本独特の立場を擁護し、日本とナチスドイツとの間により緊密な関係を築くことに努力した。井上秀子の汎アジア主義への転向は、汎国家的イデオロギーまたは汎民族的イデオロギーについて何かを示唆しているのだろうか。この発表では、井上秀子およびその夫井上雅二の生涯を考察することによって、これらの質問に答えようとするものである。

発表者の主張は、井上秀子と井上雅二が汎アジア主義に対して、異なったアプローチをしたことは、ジェンダーと汎アジア主義との関係における一般的な真実を示唆しているというものである。1930年代に出世した女性たちは、明確に定義された女性の役割を支持することで出世し、その役割は文化国家的イデオロギーの見方と一致するものであった。1920年代を通して日本の国際関係で女性がより大きな役割を与えられてしかるべきであると主張し続けた井上秀子は、1930年代に汎アジア主義に転向することで、女性が国際関係において活躍できるという考えを推進し続けた。

略歴

ノックス大学歴史学部長、同大学グローバル・スタディー・センター共同所長。1996年6月シカゴ大学にて博士号（近代日本史/国際史）を取得。最近の著書・論文に「Globalization and Historical Writing: Home Economics as Internationalism in Japan 1920–1940」『Waseda Journal of Asian Studies』December、2001、「The Limits of Cultural Rule: Internationalism and Identity in Japanese Responses to Korean Rice」『Colonial Modernity in Korea』（Gi-Wook Shin and Michael Robinson 編）、「The Intellectual Origins of Colonial Trusteeship in East Asia: Nitobe Inazo, Paul Reinsch and the End of Empire」『The Asian American Review』17, 1999 などがある。

比較的观点からみた汎ヨーロッパ主義運動

ハラルド・クラインシュミット

概要

汎ヨーロッパ主義がもはや存在しないという見解は、決して正しいとは言えないだろうが、汎ヨーロッパ主義が思想として重要であったという見解も誇張であろう。汎ヨーロッパ主義は 20 世紀前半の思想の中で難しい位置を占め、多くの問題を抱える遺産を残した。思想・運動としての汎ヨーロッパ主義は、1920 年代の文化的悲願主義に対する動きであった。ドイツ語圏で汎ヨーロッパ主義を提唱した Richard Nicolaus Coudenhove-Kalergi 伯爵 (1894 ~ 1972) は、物質主義と近代技術の弊害に対抗する理想主義を尊重するように提唱し、世俗化と社会主義の脅威、そして「ポピュリズムと軍国主義の猛威」に対する防御として、貴族階級の文化の尊重などを唱えたのであった。

物質主義、世俗化、ポピュリズムを敵視した汎ヨーロッパ主義は、貴族階級にのみ価値を認め、貴族階級のみがその世界主義的価値観とヨーロッパに広がる親族ネットワークを通してヨーロッパ統合を実現できるとした貴族階級の伝統的な自負に基づく保守的なイデオロギーであった。汎ヨーロッパ主義者たちは、進歩と平等に反対する一方で平和を主唱した。日本人の母親と人種差別批評家として知られた父親を持った Coudenhove-Kalergi 伯爵は、汎ヨーロッパの思想を最も明確に表現できる提唱者であった。しかし、その思想の価値観はほとんどの人々にとって魅力のないものであり、矛盾に満ちていた。貴族階級のエリート意識、ふさわしくない形での理想主義的価値観の尊重、そして宗教上の派閥主義によって、汎ヨーロッパ主義は社会の進歩から取り残され、結局ヨーロッパ統合に大きく貢献することができなかったと言えよう。

略歴

筑波大学国際関係史教授。1949 年ゲッティンゲン生まれ。ゲッティンゲン大学、アムハースト・カレッジで歴史学、英語学、人類学、哲学を学ぶ。1978 年ゲッティンゲン大学博士課程 (歴史学) 修了。1985 年シュトゥットガルト大学で教授資格取得。1980 年よりシュトゥットガルト大学で歴史学を教え、1989 年より現職。最近の著書に『The Nemesis of Power. A History of International Relations Theories』(Reaktion Books、2000); 『Understanding the Middle Ages 』(Boydell & Brewer、2000); 『ドイツのナショナリズム』(采流社、2001); 『Menschen in Bewegung』(Vandenhoeck & Ruprecht、2002) などがある。

コメンテータ： スヴェン・サーラ

略 歴

ドイツ-日本研究所研究員。ドイツのマインツ大学、ケルン大学、ボン大学で、歴史学、政治学、日本学を学ぶ。1996～1999年まで東京、金沢で研究を行い、1999年ボン大学にて博士号を取得。博士号学位論文は『Zwischen Demokratie und Militarismus: Japans Kaiserliche Armee in der Politik der Taisho-Zeit (1912–1926)』(大正デモクラシーと陸軍：シベリア出兵期における民主主義と軍国主義、Bier'sche Verlagsanstalt Bonnで刊行、2000)。金沢大学、マールブルグ大学(日本史)で教鞭を執った後、2000年11月より現職。現在、大正時代における政治結社の役割に焦点を当てた研究を行っている。最近の著書・論文に『Pan-Asianism in Meiji and Taisho Japan – A Preliminary Framework』(近代日本におけるアジア主義 仮説、DIJ Working Paper 02/4, 2002); 「Japan in der internationalen Militarismusforschung」(軍国主義を巡る国際論争と日本、『Japanstudien』14、2002); 「Zur Popularisierung und Visualisierung von Geschichte in Japan. Ein Beitrag zur aktuellen Diskussion um Erinnerungskultur」(歴史のポピュラリゼーションとビジュアリゼーション：現代日本における「歴史記憶論争」について、『Beiträge zur Japanforschung. Festgabe für Peter Pantzer zu seinem sechzigsten Geburtstag』、2002); 「岐路に立つ日本外交。第一次世界大戦末期における<人種闘争論>と<ドイツ東漸論>」『環日本海研究』8号(近刊)などがある。

パネル4：地域覇権^{ヘゲモニー}の創出：「新秩序」に向けた日本の探求

パネル4では、アジア大陸における日本の膨張、および東アジアでの「新秩序」確立のための活動を正当化する中で、アジア主義の果たした役割は何だったのか？「アジア」認識についての知的論説・論議において、どのような流派、学派が存在していたのか？アジア主義思想はどのように政界の中に提唱されたのか。アジア主義は日本の外交政策、特に1930年代以来最も密接な同盟国であったドイツと日本の関係に、どのような影響を与えたのか？などについて考察し、討論する。

座長：モニカ・シュリンプ（ドイツ-日本研究所）

徳ある新秩序のビジョン：安岡正篤の王道論

ロジャー・ブラウン

概要

本発表では、国家主義的知識人であった安岡正篤（1898年～1983年）が表現した東アジアにおける新秩序の理想像について取り上げる。儒教の学者であり、第一次大戦後の右翼団体の主要な活動家であった安岡は、復古革新派の主要人物で、官僚、財界、宮中の有力者たちの指南役でもあった。ベルサイユ条約の時代から、安岡が思い描いていた汎アジア主義は、東洋的教養から活力を得、有徳な官吏あるいは君子の監督の下で実現される東アジア文明の復興であった。これは本質的には、王道の原則に従って国内の日本的維新を図る必要があるとした安岡の主張を特徴付けた大局観と共通している。安岡にとって、これらの価値観は満州国統治のための最善の手法であったばかりではなく、日本を治める上でも最善の手法であった。さらなる拡張によって戦争が始まると、安岡は大東亜建設への中国の協力を取り付けるために中国王朝史についての自身の知識を指針として提供することを申し出る一方で、日本の優れた人材が進み出て、日本国内外で王道の実現に協力するように呼びかけた。

略歴

南カリフォルニア大学歴史学部博士（近代日本史）課程に在籍、テンプル大学ジャパン非常勤講師（東アジア史）。1962年生まれ。1993年ノース・カロライナ大学グリーンズボロ校歴史学部修士（米国史）取得。博士論文の研究は、儒者、国家主義者であった安岡正篤の思想と政治的活動に焦点を当てている。安岡は、1920年代から1970年代にわたり政財官界に影響を与えた人物であった。著者・論文に「Yasuoka Masahiro and Takushoku University（安岡正篤と拓殖大学）」『拓殖大学百年史研究』10号、2002年7月；「安岡正篤の大正・昭和初期における人格論」『郷学』（近刊）がある。

大日本帝国の中の民族概念の役割

ケヴィン・ドーク

概要

本発表では、戦時中の日本で知識人や官僚等が幅広く共有し、推進した新しい形態の地域主義のビジョンについて考察する。この新しい地域主義は後に「東亜新秩序」と呼ばれた。現時点では、日本帝国主義のおおよその特徴と 1930 年代中頃の国際社会からの日本外交の撤退の影響について理解が深まっているが、日本の地域主義の文化的イデオロギー研究はそこまで進んでいない。

この発表で、アジアで地域主義を確立しようとした日本の努力の背景にあったビジョンは、第一次大戦開始頃から始まった重要な社会的アイデンティティとしての民族性の再発見によって特徴付けられていたということを目指したい。1930 年代までに国家または「folk」(民俗)のアイデンティティに対する新しいアプローチが台頭し、このアプローチは民族のアイデンティティまたは国家の柔軟性を強調した。高田保馬は、東アジアのほとんどの人々が政治的に独立した国家を目標としていた時に、東アジアのすべての人々を含む、より広い意味での「民族」を唱えた。高田の考えは、民族学者の岡正雄が示した階層制の社会構造の概念に組み込まれた時、新しい地域主義を形成する上で有益であった。岡の「民族秩序」の概念は、東アジアを同地域の様々な民族を垂直の階層に並べたものとして見ていた。最後に、戦時中の福祉省の官僚たちは東アジア政策を立案し、これらの異なるアプローチを統合することを試みた。結論として、戦時中の東アジアにおける地域主義への支持、また特に「民族」という概念の役割と範囲を綿密に検討することによって、東アジアの地域主義を復活させようとする今日の動きが、過去からの概念を遺産として受け継いでいるという驚くべき事実が明らかになる。

略歴

ジョージタウン大学東アジア言語・文化学科、日本基金研究教授。イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校(近代日本史)で教鞭を執った後に現職。著書に『Dreams of Difference: The Japan Romantic School and the Crisis of Modernity』(University of California Press、1994、日本語訳:『日本浪漫派とナショナリズム』、柏書房、1994)、共編書に『Constructing Nationhood in Modern East Asia』(Kai-Wing Chow and Poshek Fu と共編、University of Michigan Press、2001);『Overcoming Postmodernism: Overcoming Modernity and Japan』(Takada Yasunari と共編、Eikoh Institute of Culture and Education、2002)、その他近代日本史における民族意識や民族アイデンティティに関して論文が多数ある。

汎ゲルマン主義と汎アジア主義の出会い：ナチスドイツと日本の大東亜政策

ゲルハルト・クレプス

概要

「人種主義」を世界観の中核におくドイツ総統ヒトラーは、基本的に全ての非ヨーロッパ「有色人種」を嫌ったのであり、それは政治、外交にまで影響を及ぼしたと言えよう。その中で日本人も一時的に例外となったのにすぎなかった。ヒトラーの基本構造は全世界でヨーロッパ人の優位を強化するということが第一目的であったが、これは東アジアから「白人」を追放するという日本の目的と鋭く対立した。奇妙なことに、ヒトラーは第二次大戦中、アジアにおける英国領土を守るために、英国に軍事援助を提供することを考えたと言われている。先ず、日本とロシアが敵対視していることを理由に、ヒトラーがロシア・ソ連の永年の敵である日本への接近を試みた。更に、ヨーロッパ大陸におけるドイツの自由な足がかりと引き換えに、英国に海外への足がかりを与えるという提案を拒否されたため、日本との軍事提携はより魅力的になった。日本はドイツとの関係をいったん切るが、1940年オランダ、ベルギー、フランスに対する予期せぬドイツの勝利に続き、英国までもが敗北の瀬戸際にあるかのように見え始めたことにより、ドイツとの接近に新たな興味を示した。ドイツの味方となることで日本は東南アジアにおけるヨーロッパ諸国の植民地、特に石油資源豊富なオランダ領東インドを獲得する機会を得た。

1940年9月三国同盟が、米国に対する「防衛同盟」として成立し、世界をブロック化する合意がなされた。日米開戦になると、ドイツとイタリアも米国に宣戦を布告するようになった。しかしながら日本とドイツの不信感は拭いきれなかった。イギリスとドイツの“民族的親近感”を背景に、ヒトラーはしばしば“イエロージャパニーズ”と同盟を決めたことに後悔している様子をイギリスに示した。それに加え、日本の軍事的勝利に対し、ドイツでは「黄禍論」が再現する恐れもあり、ヒトラーが戦中にアジア人を犠牲にし、イギリスとの平和条約を目的としていたことも日本ではよく知られていた。

略歴

ベルリン自由大学教授。1943年ワルシャワ生まれ。ハンブルグ、フライブルグ、ボン、東京で歴史学、ドイツ言語学、日本語を学ぶ。早稲田大学及びフライブルグ大学で教鞭を執り、ドイツ-日本研究所及びポツダム軍事史研究所研究員を経て2000年より現職。博士号学位論文『Japans Deutschlandpolitik 1935-41』(2巻、OAG、1984)はドイツ東洋文化研究会の「日本賞」を受賞。編書に『Japan und Preussen』(日本とプロシア、Iudicium、2002)、共編に『Formierung und Fall der Achse Berlin-Tokyo』(ベルリン 東京枢軸の形成と衰退、Iudicium、1994);『1945 in Europe and Asia』(欧州とアジアにおける1945年、Iudicium、1997)がある。

コメンテータ： 波多野 澄雄

略 歴

筑波大学社会科学系教授。法学博士。慶應義塾大学大学院法学研究科博士課程修了後、外務省外交史料館非常勤職員、防衛庁防衛研修所戦史部研究員、コロンビア大学東アジア研究所客員研究員を経て1988年より現職。1995年～96年ハーヴァード大学ライシャワー記念日本研究所客員研究員。主な著書に『太平洋戦争とアジア外交』（東京大学出版会、1996）；『幕僚たちの真珠湾』（朝日新聞社、1991）；『太平洋戦争』（共編著、東京大学出版会、1993）；『アジアのなかの日本と中国』（共編著、山川出版社、1995）；『International Commercial Rivalry in Southeast Asia in the Interwar Period』（共著、Yale University Press、1994）；『太平洋戦争』（共編著、東京大学出版会、1993）；『The Opening of the Second World War』（共著、Peter Lang、1991）；『終戦工作の記録』上下（共著、講談社、1988）などがある。

* * * * *

パネル5：アジア主義の変形：戦中から戦後へ

パネル5では、戦争の終結と大日本帝国の消滅から、アジア主義はいかなる形で生き延びたのか？戦後期にアジア主義を議論し続けた理由は何だったのか？日本の外交政策および脱植民地化の過程で、アジア主義はどのような役割を果たしたのか？アジア主義は、現代まで日本にどのような影響を与えてきているのか？更に、日本にとって、またアジアに於ける日本の地位にとってアジア主義の遺産とはどのような意味を持つのか？などについて考察し、討論する。

座長：スヴェン・サーラ

運命の構築：蠟山政道と戦中日本の東亜共同体

ヴィクター・コシュマン

概要

日本史における日本のアジア主義を考えてみると、理想化された非常に概念的な認識の「アジア」に依存する傾向がみられる。実際、このような「アジア」という概念は無意識のうちこの地域の複雑かつ多様な「実際」の現象に取って代わっていることもある。そのような場合アジアは、集団的幻想となり、特に政治や軍が介在する政策がこのような幻想に基づくとなると、その結果は悲慘的になりかねない。

勿論、汎アジア幻想が強まった1930年代半ばからアジア太平洋戦争が終わるまでの時代においても、日本のアジア政策に関心を持つ人の間ですら、広く受け入れられたことはなかった。政治学者蠟山政道のような解説者はアジアの「運命」に関しては独自の空想を持ちながらも、アジア政策を討論するたびに現実主義、経験主義そして理論的な分析を織り込もうとした。「アジア」は自然に結合した「地域」では決してないという受け止めたくない事実を注意喚起し、さらに日本は「大東亜共栄圏」の中に取り組みもうとしている地域と歴史的にみてほとんど交流がなかったと指摘している。この時代に蠟山が取ったアジアへのアプローチで注目すべき点は、蠟山自身がアジア共同体の構築を目指した政治プロジェクトに対して非常に主体的で、道具主義的な態度をとり、偏狭なナショナリズムを超越し、アジア地域の本来の性質の中に取り組みでいかなければならないと確信していたことである。

略 歴

コーネル大学歴史学教授。国際基督教大学（ICU）上智大学で学び、『The Japan Interpreter』誌の翻訳者として勤務した後、1980年シカゴ大学で歴史学博士号を取得。研究分野は江戸後期から戦後までの日本の思想史に焦点を当てている。現在の研究内容としては1960年代における技術、市民社会、アメリカ近代化論に対する日本の反応の理論を含む。著書として『Revolution and Subjectivity in Postwar Japan』（University of Chicago Press、1996）；『The Mito Ideology: Discourse, Reform and Insurrection in Late Tokugawa Japan, 1790–1864』（University of California Press、1987、日本語訳：『水戸イデオロギー：徳川後期の言説・改革・叛乱』、ぺりかん社、1998）；『Asianism's Ambivalent Legacy』、『Network Power. Japan and Asia』（Peter J. Katzenstein and Takashi Shiraishi 編、Cornell University Press、1997）；共編書に『Conflict in Modern Japanese History: The Neglected Tradition』（Tetsuo Najita と共編、Princeton University Press、1982）がある。

国際関係とアジア主義：戦前・戦後・現在

初瀬 龍平

概要

日本のアジア主義では、ナショナリズム（膨張主義的）、西力東漸への反応、及びアジア人への共感がその要素となっており、そこには国家、国際、トランスナショナルの三面がある。アジア主義の表現形態では、政治的、経済的、文化的に分けることができるが、そのいずれが強調されるかは、基本的には国際関係の変容にかかわっている。

戦前では、アジア主義は、アジア諸民族の民族独立運動との関連で、主に政治的なことが目立った。しかし、戦後にアジアの諸民族がほとんど独立し、経済開発を国家目標におくようになると、アジア主義はむしろ経済的な面が強くなっていった（アジア主義は消えたように思えた）。冷戦が経済的にもアジアの地域主義を阻害していた。しかし、冷戦期でも、日本の NGO は、アジアの地域的な自立、コミュニティの自立に協力を始めており、今日では、アジアでトランスナショナルな人々の相互活動が活発化している。これを新しいアジア主義と呼ぶのがよいかどうかは分からないが、この新しい動きの意味は、アジアに人と人の世界を作るうえで重要である。

報告では、まず全体の見取り図を述べ、次に戦前、戦後、冷戦後の現在に分けて、日本のアジア主義の変容を分析し、最後に NGO 活動家の実践例を紹介したい。

略歴

京都女子大学現代社会学部教授。神戸大学名誉教授。法学博士。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得認定退学後、北九州法学部助教授、神戸大学法学部・大学院法学研究科教授、Sheffield 大学日本研究センター客員教授を経て、2001 年より現職。主な編著書に『伝統的右翼内田良平の研究』（九州大学出版局、1980）；『国際政治学—理論の射程』（同文館、1993）；『国際関係キーワード』（共著、有斐閣、1997）；『内なる国際化』（三嶺書房、1988）；『エスニシティと多文化主義』（同文館、1996）；『国際関係論のパラダイム』（有信堂、2001）；『国際関係思想』（共訳、岩波書店、1991）；『現代政治思想の原点』（共訳、三嶺書房、1992）；『アジアの政治発展』（共訳、三嶺書房、1997）などがある。

戦後知識人にとっての「アジア」

小熊 英二

概要

1950年、当時もっとも人気のあった知識人の一人だった清水幾太郎は、「いま、日本人はふたたびアジア人である」と述べた。敗戦で打ちのめされ、経済的にも貧困におちいった戦後日本の知識人たちにとって、日本は西洋列強の一員ではなく、弱小な「アジア」の国として意識されていた。そこから、西洋近代に学べという志向と、「アジア」と伝統を再評価せよという志向の、日本近代史上何回目かのぶつかりあいが発生した。

この報告では、戦後日本の進歩的知識人を中心に、彼らにとって「アジア」とは何だったのかを検証する。そして、敗戦直後の時代から高度成長期にかけて、そうした「アジア」像がいかに変容したかを概観する。それは同時に、「西洋」と「アジア」という二つの他者の間で、日本のナショナル・アイデンティティがいかに揺れ動いたかを検証することになるだろう。

略歴

慶應義塾大学助教授。1962年東京生まれ。東京大学農学部卒業後、岩波書店勤務を経て、東京大学教養学部教養学科博士課程修了（学術博士）。主な著書に『単一民族神話の起源 <日本人>の自画像の系譜』（新曜社、1995年）；『<日本人>の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）；『A Genealogy of “Japanese” Self-Images』（Trans Pacific Press, Melbourne, 2002、『単一民族神話の起源』の英訳）；『<民主>と<愛国> 戦後日本のナショナリズムと公共性』（新曜社、2002年）などがある。

1955年のバンドン会議と植民地主義の克服

クリスティン・デネヒィ

概要

日本は1955年4月インドネシアのバンドンのアジア・アフリカ会議に出席した。1945年まで日本は帝国主義国であったにもかかわらず、1955年には進歩的な日本の知識人、歴史家が、日本のバンドン会議参加により西洋（特に米国）帝国主義に対抗するアジア・アフリカ連帯の重要性を示すことを強調した。日本のそのような知識人の考えでは、アメリカによる日本占領が終了してちょうど3年目に開催されたバンドン会議への参加が、冷戦体制における他の国々との連携意思を示す機会であった。そう言う意味で、バンドン会議およびインドのデリーで開催された1955年のアジア会議は戦後の重大な交差点であり、新しく形成しつつある国際秩序への日本の抵抗を表すものである。

この発表で、戦後の進歩的な知識人たちは日本の帝国主義の歴史を批判しながら、同時に国際政治の批判の一種として汎アジア主義を唱えたことを強調したい。この汎アジア主義という新しいレトリックの裏には反核と反帝国主義という感情的な動機があった。その中で最も注目すべき点は、戦前の日本人が日本のエリートによって犠牲にされただけではなく、戦後の日本人も占領期における米国の覇権、及び冷戦体制での核の傘下によって、犠牲にされつづけた。

略歴

カリフォルニア州立大学フラートン校歴史学部助教授。上智大学にてアジア研究修士号、カリフォルニア大学ロサンゼルス校にて歴史学博士号を取得。最近の著書・論文として「植民地支配を受けた側の視点から」『帝国主義の時代と現在：東アジアの対話』（比較史・比較歴史教育研究会編、未来社、2002）、翻訳書に「The History Textbook Controversy and Nationalism」（中村正則著「歴史教科書問題とナショナリズム」）『Bulletin of Concerned Asian Scholars』30:2, 1998がある。

コメンテータ：藤原 帰一

略 歴

東京大学法学部・大学院法学政治学研究科教授。1956 年生まれ。東京大学法学部・大学院法学政治学研究科博士課程単位取得中退後、東京大学社会科学研究所、千葉大学法経学部助手、東京大学社会科学研究所助教授を経て現職。主な編著書に『戦争を記憶する - 広島・ホロコーストと現在』（講談社、2001）；『デモクラシーの帝国 - アメリカ・戦争・現代世界』（岩波書店、2002）；『テロ後 世界はどう変わったか』（岩波書店、2002）などがある。他に国際関係論文、書評、翻訳書が多数ある。

総 括：三輪 公忠

略 歴

上智大学名誉教授。1929 年生まれ。Princeton University, Ph.D.（歴史学・博士）。上智大学国際関係研究所長、同アメリカ・カナダ研究所長、メキシコ大学院大学、プリンストン大学、マウント・アリソン大学で客員教授、ソ連科学アカデミー世界経済国際関係研究所及びニュージーランド・キャンタベリー大学太平洋研究所客員研究員を務めた。主題に関係する主な邦文の著作は「満州をめぐる国際関係」『環』10（2002 年夏）；「満州事変と『八紘一宇』 - 石原莞爾を中心に」『再考・満州事変』（軍事史学会編、錦正社、2001）；『隠されたペリーの「白旗」』（信山社、1999）；「松岡外交の真意」『日本の岐路と松岡外交』（三輪公忠・戸部良一編南窓社、1993）；「1924 年排日移民法の成立と米貨ボイコット」『太平洋・アジア圏の国際経済紛争史』（細谷千博編、東京大学出版会、1983）；『東亜新秩序』と『大東亜共栄圏』構想の断層』『再考・太平洋戦争前夜』（三輪公忠編、創世記、1981）；「アジア主義の歴史的考察」『総合講座・日本の社会文化史』第 4 巻、（平野健一郎編、講談社、1973）；「徳富蘇峰の歴史像と日米戦争の原理的開始」『西洋の衝撃と日本』（芳賀徹他編、東京大出版会、1973）；『松岡洋右 - その人間と外交』（中公新書、1971）；『環太平洋関係史』（講談社現代新書、1968）などがある。
